



五
通
方
類
書

13
3045
5



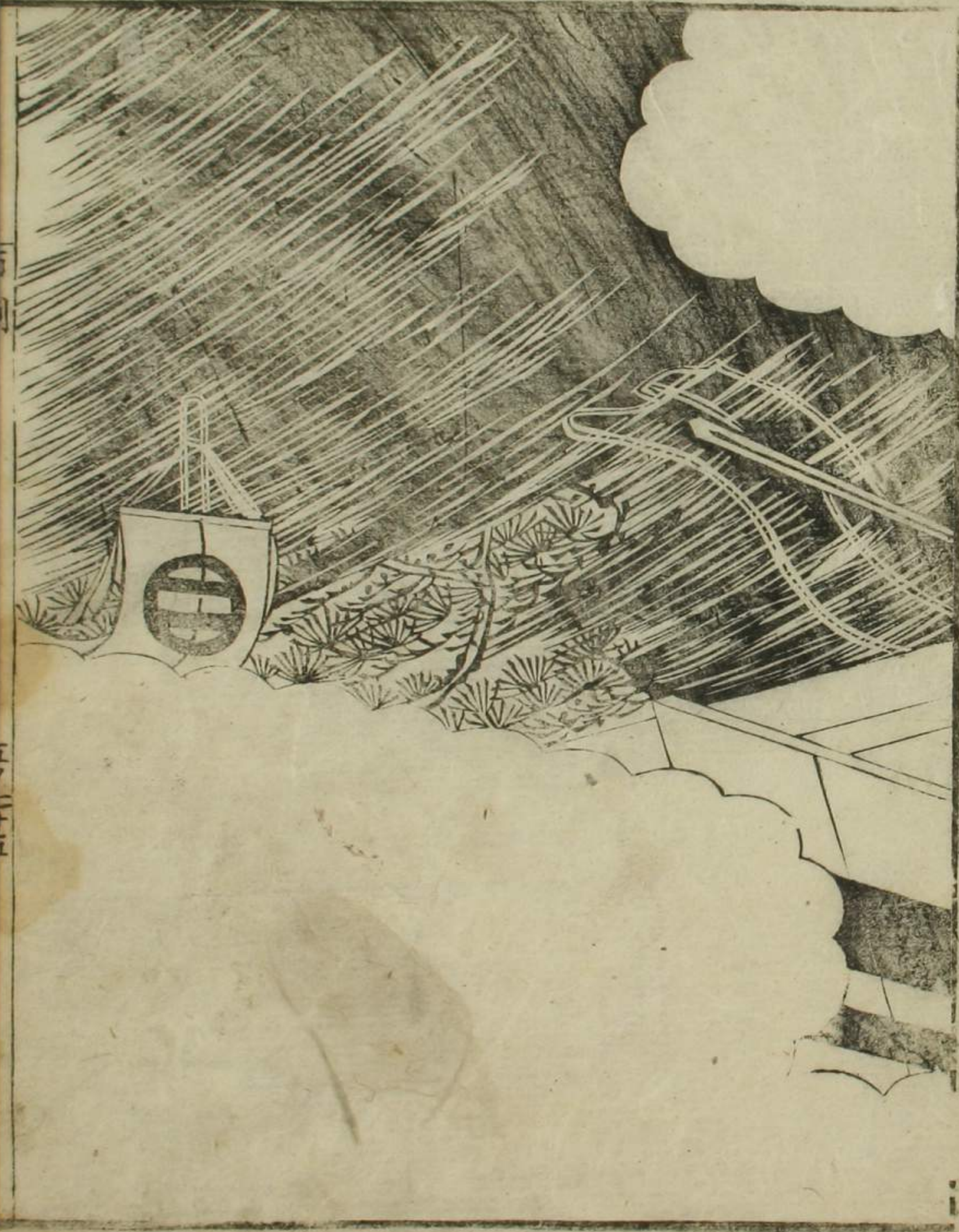


高毎
三十三
あつてあつてはまふも捕りしぬまひさ今其はひまき形へ
かして織部は思ひのまふ軍用金と集あむ人とを不懐と
一ゆふとて海をやり一日毎にやれはるは法皇の御
勇統らる者とかさひもふこ士の意傳らるを伊ざつた幻術
まふまふ一軍の者二千余人及びくわむこまを徳をよ
も織部一々まふ國のかりに朝敵の名ありてはまふと南
朝の皇統小倉殿はまふとまふ宮とまふまふまふは
玉司の御影と始有相回の武士國より蜂起して力と金と
しや思ひもまふ織部の御影ありて竊まふまふ御
是と勸めまふも同意ありて橋山懸はまふ面
精忠をまふとまふ相回の功をまふと君臣の約を
まふ

たふふ折しも將軍義教ハ鎌倉の後領持氏と不和
事ふ征伐せんともあつてまふ山見物ありまふ
あふ川範政がまふ赴は國の動亂をうくんと
く織部はまふ傳へまふ屋まふとまふ都を
序路まふと休まふと取こめ容易討てしはまふ
ゆまるとまふ喜ひ徒黨の面は合國の配とまふ一人
弓矢の器は物あ備へまふとまふとまふとまふ
まふとまふ勢のまふとまふとまふとまふとまふ
昔も者まふとまふとお日塚まふと後後まふと書
道徒まふとまふと遠國まふと逃まふと勢の
かんとまふと下乃精兵千人をまふとすまふと
まふと

九圍一内を攻めんとし勇を勦射を空にせしむるも其の
 くちをくちくちとて男の面を破れしを破つて進めんと
 する所織部一人の死を以て日本國中に軍を遣は
 せしむるも思ふに況や小勢を慶弼するに囊中の物を
 擲するもやきくもふく例の如くは行へざる腥き一
 陣の風を以て吹寄せしむるも悪鳥猛獸に似たるも
 出ずること教を以て山嶺を研ぎて齒牙を折り人をと
 けしむるも熱い所の勇すも面をむるもくちくち古孔明
 言を聞て攻一内もかきくも依り防ぐも方便
 も好む事あるに似たりも進まずも退くも進退未だ
 拍ひを待たしむるも後期波着しむるも

冷方かりくるとせしむるも將軍の如き
 ことすきくはも勢をせしむるも如何とて御をくちくち
 兵を備え日夜浮定まらうくして更なる一変を以て
 くるも十日づらも過らざるも言はれし英名を以て
 よ有るも勢御部を以て金く勢の強くして將軍が
 もらひしむるも力の中にも思ひし
 らば御部を以て御部の力を以て御部の
 かる清水の如きも新らして日今を断るも御部の
 ちくちくは御部を以て御部の力を以て御部の
 感通も破るも御部の力を以て御部の
 ちの御部の力を以て御部の力を以て御部の



大に美ひしむる言のいも 同慶の者もやと思ひおぼも
佛の示現もやと心付らる多しあやと聞かす信も
よ物ありし者もたそ多しあやと聞かす信も
いひしむる言のいも 同慶の者もやと思ひおぼも
かゝりし言のいも 同慶の者もやと思ひおぼも
破りし言のいも 同慶の者もやと思ひおぼも
ふりし言のいも 同慶の者もやと思ひおぼも
乃ほりし言のいも 同慶の者もやと思ひおぼも
ふりし言のいも 同慶の者もやと思ひおぼも
乃ほりし言のいも 同慶の者もやと思ひおぼも
ふりし言のいも 同慶の者もやと思ひおぼも
乃ほりし言のいも 同慶の者もやと思ひおぼも

なすも者も 織部が御すも 湖の唐の代は 唐子和尚白雲
洞より竊ちて 左道のいふも 聖姑と胡永児王則乃徒より傳
へたも 一の言のいも 乱と治と 徳尊と徳遜より 傳へた破邪神
呪と唱へ猪血羊血乃び馬尿と 糞蒜のいふも 乃探物とそとぎ
かゝりし言のいも 一滴は徒乃 身上にかけしも 神鬼を弄ぶも
能くも 一の言のいも 破りし言のいも 同慶の者もやと思ひおぼも
言乃びたも 一の言のいも 破りし言のいも 同慶の者もやと思ひおぼも
婦人より 一の言のいも 破りし言のいも 同慶の者もやと思ひおぼも
仇なりし言のいも 一の言のいも 破りし言のいも 同慶の者もやと思ひおぼも
格なりし言のいも 一の言のいも 破りし言のいも 同慶の者もやと思ひおぼも
何なりし言のいも 一の言のいも 破りし言のいも 同慶の者もやと思ひおぼも

高橋
三十一
は海軍に得て身不肖中をいふことなす。子細めをば
乃討を許し経るがと形ひくるるが許容りけ
もを助波義淳も信よまけるが敵を奇代の幻術を行へ
手事しく攻戦にまが如く魁北きんと必下りいさるめ
計をさるるやまがれた空易にさかへんとかへんとかへ
くまがらうるもむいやく勇まを励し一戦に討して法
人の眼とがらうると宝所の所所を返中一竊し書の
いを館中に招き破邪の神呪を授るべしといふ言のい

かこはらうるは是を信く君の武威よよめく運賊破るは率
家名を命と對着職をを生捕し一命よ下りあつば自ら
首を刎く親吏の書信よもめれた志氣よいと秘ひあまは
いづらうるや糸切まは子細めいと約ありては勢二千
余騎と僧し猪羊の血馬尿大糞の糞物とまき挿ふたへ
雑をよ招きありてお馬のいけなと知らる佳いなる計よを
めやしと海軍に織部が新波が軍勢と破るしうる海軍に
ある敵もたけいよと塔と櫓とを挿るるとを櫓とを
防禦の備へて固めて小倉殿と遠くをうかまよ玉座を
ちのよとあも自ら將軍と潜号し橋山懸を副將し一才
鬼ある者を撰きて一隊くの大ねと定の塔と後あく自らも

上は登り日毎に軍勢引乃洞窟を以て軍令を教めし
陣法を以て空鶴の伎を以て流石と名をかしひやと空所を押
よせんと陣をさへぐらるる西へ畠山満家が去る陣波と云
と上の山は佳意の面を以て名ひあつた日のもかゝりもあらまど
攻めたる洞窟より飛出むるを同様に甲もあつた討たると幻術
を教めよ空鶴の伎を以て斬るもさへも畠山が落ハ隊伍を以て
して少くも乱れずその戦ひ志が捷勇と云ふにさうさうで死
る後軍勢を以て昭と名をせんと山懸一角大を以て目ふりしめ
てまの山を以て斬る廻る捷勇と云ふにさうさうで死
つる西へ畠山が方々も花やふもさうさう武者一騎を以て乃
鎗を以て山を以てさうさう令がさうさうに秘術を以てし

つらつらとまじりて我を詠味方も今日乃我ひは是かうと云う
を以てさうさう見物で山懸刀はさうさうさうさうさうさう
を以て救ふと職アハ門上ふらるる玉例のさうさうさうさう
西風起る鬼を以て撃つるさうさうさうさうさうさうさう
級せんともさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
物を門上ふむらうと云ふたかさうさうさうさうさうさう
かり妙も捷勇と云ふさうさうさうさうさうさうさうさう
了いささかもさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
ねの妙術も破るさうさうさうさうさうさうさうさうさう
を畠山が勢はさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
徒の大將を討たると云ふさうさうさうさうさうさうさうさう

西劍奇遇卷之五終
遊ゆるるとと我わるるままごごひひ好好きき列列女女ららううくくしし雌雌雄雄乃乃劍劍はは夜夜
以以唐唐志志をを次次にに書書けけりり

西劍奇遇卷之五終
大尾

安永八己亥年正月吉日

寺町三条上町

京都書林
菊屋安名衛

實話じつわ東西とうせい傳でん
全ぜん部ぶ五ご冊さく
はは書しよのの古こ今いまううららいいたた人ひと情じやうをを痛いたむむももと
ああつつたたららおおりりをを保たもつつててななららうう

